

## 睡眠および夢見における知覚と記憶：ベルクソンの講演「夢」を手がかりに

著者	齋藤 範
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	37
ページ	85-103
発行年	2021-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00024041">http://doi.org/10.15002/00024041</a>

# 睡眠および夢見における知覚と記憶

## —ベルクソンの講演「夢」を手がかりに—

齋 藤 範

はじめに

1896年に『物質と記憶』を著したベルクソンは、その五年後、睡眠時の夢見の現象を主題とする講演を行っている<sup>1</sup>。「夢 (Le rêve)」と題されたその講演は、多少手が加えられたのち、『精神のエネルギー』(1919)に収められた<sup>2</sup>。

『物質と記憶』では、わたしたちの生における身体と精神の連絡が二元論的な立場から知覚と記憶の問題として解き明かされる。その成果を睡眠中の夢という現象に特化して適用したのが講演「夢」である。

哲学の関心がわたしたちの生のすべてに向かうものであるならば、睡眠という行為もまた重要な課題となるだろう。単純に計算しても人生に費やす時間の三分の一は眠っていると言いうるのであるから<sup>3</sup>、眠りについて考察することは意味のないことではない。今なお生理学的にも心理学的にも解明し尽くされたとは言いがたいこの現象を、ベルクソンは20世紀の冒頭に、彼固有の知覚と記憶をめぐる理論の展開として哲学的に説明しようと試みている。

本稿では、主として講演「夢」と『物質と記憶』のとりわけ第三章を中心に、両著作で提示されるベルクソンの図式の異同にも触れながら、夢の出現は哲学的にどのように説明しうるのか、そして目覚めているときのわたしたちの精神と身体の関係と、眠っているときのそれとはどのような違いがあるかについて考察し、

<sup>1</sup> 1901年5月26日にフランスの心理学総合研究所 (Institut general psychologique) にて行った講演。

<sup>2</sup> 以下、ベルクソンの著作の出典表記には下記〔 〕内の略語を用い、ページ番号と共に本文中に記載する。ページ番号はPUF Quadrigeの増補校訂版による。

〔ES〕: *L'énergie spirituelle*, PUF, 2017 (『精神のエネルギー』)

〔MM〕: *Matière et mémoire*, PUF, 2010. (『物質と記憶』)

<sup>3</sup> ウィリアム C. デメント『スリープ・ウォッチャー』大熊輝雄訳、みすず書房、1994年、58ページ。

睡眠の何たるかを明らかにしたい。

## 1. 夢見の素材としての感覚

講演「夢」において、ベルクソンは、わたしたちがごくふつうに抱いている睡眠時の夢に関する印象を問い直すことから始めている。その問いを具体的に言えば、次のようになる。「夢のなかで体験するさまざまな感覚は実際に存在するものなのか、それとも現実には存在せず、夢のなかだけのものなのか」という問いである。

一般的には、夢のなかで味わうさまざまな感覚や出来事は「現実には存在しないもの」と考えられているだろう。おそらく、わたしたちの一般的な常識は、夢について次のように考えるだろう。「そもそも眠るということは、身体的な諸活動を一時的に〈休止〉<sup>4</sup>し、文字どおり〈休眠〉することであり、その身体の休止状態にあって見る夢は、覚醒時の活動する身体が体験する現実とは明白に異なっていて、まして夢のなかで起こる出来事や夢に登場する事物は現実には存在するものごとではない」と。

例えば、夢のなかで身体のどこかが痛んでも、それは覚醒時に存在する現実の痛みとは違い、夢だからこそそのそれであり、本当は（つまり覚醒時の身体感覚としては）痛くないのに痛いと感じているように〈夢見ている〉だけだ、ということである。要するに、夢を見るということは、現実には存在しないものを存在するかのように錯覚するということである。

ところがベルクソンは、この常識に対し、夢見には現実には何かが存在していると考え、「眠っているときにも、目覚めているときと同様に、感覚し得る物質 (*matière sensible*) が視覚や聴覚や触覚に与えられているのではないか」[ES85]と述べている。この「感覚し得る物質」を捉えるのは身体である。現代の心理学や生理学の主要な見解と同様に<sup>5</sup>、ベルクソンにおいても睡眠は、単なる身体の〈活動休止＝休眠〉ではないということになる。

例えば視覚。これもまた一般に、まぶたを閉じること、すなわち目をつぶるということは、何も見えなくなることだとわたしたちは捉えがちだが、実際はそう

<sup>4</sup> 睡眠を意味するフランス語 *sommeil* には「休止」や「中断状態」という意味も含まれる。

<sup>5</sup> この点については本稿第4章にて再考する。

ではないことも知っている。まぶたを閉じて、閉じられたまぶたの裏側で、実際には「多くのもの」[ES86] が見えている。ベルクソンの表現に倣って言えば、「黒い地の色」とともに、動いたり濃淡を変えたり輝いたりする「斑点」のような模様が見えている [ES86]。

ベルクソンは当時の生理学や心理学の文献を参照し<sup>6</sup>、その原因を網膜の血液循環に絶えず生じる軽い変化や、閉じたまぶたによる眼球圧迫とそれによる視神経への刺激などに見るが、こうした具体的な生理現象がわたしたちの夢をつくりあげる素地としてあるものとするのである [ES86]。

視覚に与えられている刺激が夢の素材になることを示すために、ベルクソンは入眠時や睡眠中のみならず、夢から目覚める瞬間の様子にも言及している。

例えば、非常に鮮明な夢を見たでしょう。その夢の内容を忘れずに保持したまま覚醒し、寢床の上に身を起こしてもなお、今まで見ていた夢が脳裏から離れないとき、わたしたちのぼんやりとした視覚には何が映っているだろうか。夢のなかで見ていたものの輪郭や色彩、あるいは線や点が、光とともに徐々に分解されていく様子をベルクソンは描写しながら、そこに「視覚の微粒子 (poussière visuelle)」が存在することを強調している [ES87]。こういうものをわたしたちが文字どおり肉眼で鮮明に確認するのは容易ではないだろう。筆者自身、一定期間、夢を見るごとにその内容を覚えているかぎり書きとめ、また自己分析を試みた。大抵の場合うまくいかなかったが、唯一、ベルクソンの言わんとする状況に最も接近しえたと思われた例は、以下のようなものであった。

その夢は、たいへん大きなターミナル駅の地下階へと続く、何基かの非常に長いエスカレーターの光景であった。そしてその光景が残ったまま朝の目覚めを迎えた。しかし、覚醒してもすぐには目を開かず、その光景を心に抱いたまま早朝の薄暗がりまぶたを閉じたまましていると、夢で見た光景は乳白色の光のなかにその輪郭を消していったようにも思われた。ベルクソンの言う「視覚の微粒子」を捉えたとは言いがたいが、エスカレーターの輪郭やその地下空間の印象全体が漠然とした白色の色彩のなかに霧散していく様子が感じられた。

こうした睡眠中と睡眠前後の視覚感覚が夢にもたらす状況を、ベルクソンは「内

<sup>6</sup> ベルクソンが当時参照した諸々の文献については、PUF Quadrige 増補校訂版における Guillaume Sibertin-Blanc による note を参照 [ES297]。

部原因による視覚」とする。その一方で、ベルクソンは「外部原因と呼ぶ視覚」も示している。燃えさかる炎の夢を見て飛び起きてみると、誰かが眼前にランプをかがげ、その光に照らされていたという例や、寝顔に差し込む月の光が夢に与える影響などを指摘している [ES87-88]。これは、まぶたの内側ではなく、まぶたの外側にあるものが外部原因として睡眠中にも視覚に影響を与え、それがまた夢に影響を与えるということである。主として常に「光」がその原因となることは容易に理解できるだろう。

聴覚についても同様のことが言える。内部原因としての内部感覚と外部原因としての外部感覚がある。前者は、覚醒時には気づかない「耳鳴り」のことである<sup>7</sup>。これもまた夢の素地として、睡眠中に感覚されているという。他方、後者の外部原因とは、まさに睡眠時の外部の音、——例えば家具が軋る音や雨や風の音——であり、視覚ほどではないにせよ、これもまた夢に影響を与える [ES88-89]。

触覚もまた、夢に関わってくる。眠っている間の姿勢や圧迫感、加えて着衣や寝具との接触である。空を飛ぶ夢を見るときに飛ぶ向きは、寝る向き（右向きに寝ているか左向きに寝ているか）と関係があるとベルクソンは言うが、しかし例えば、夢のなかで走ろうとしても足に力がまったく入らず、うまく走れないばかりか立っているのもやっとなという場合に、目覚めると足がしびれていたという経験は筆者にもある。睡眠時の外部感覚としての触覚が夢に関係するということは理解できなくもない。触覚の内部感覚についてはどうだろう。例えばベルクソンは、内臓に違和感をもつ夢見がそのまま現実の疾患になる事例を挙げている [ES90-92]。頭痛の前兆現象や悪寒のような、ふだんと違う感じが後味の悪い内容の夢見を起こし、目覚めると高熱にうなされていたなどということは誰にでもあるのではないだろうか。

以上を要約してベルクソンは次のように述べている。

<sup>7</sup> 耳鳴りとしてベルクソンが挙げているのは *bourdonnement* と *tintement* と *sifflement* である [ES88]。本来、いずれも各語あとに *d'oreille* を伴って「耳鳴り」という意味なるが、*bourdonnement* は *bourdonner* で、すなわち虫がブンブンとうなる音やモーターによる低い振動音のような耳鳴り、*tintement* は *tinter* で、鐘が鳴る音やチリンチリン、カチャカチャという金属的な音の耳鳴り、そして *sifflement* は *siffler* で、口笛やホイッスルのピューピューなる音や風が吹いたときにヒュウヒュウ鳴るような音の耳鳴りである。

本来の睡眠においては、わたしたちの感覚は外部の印象に対して少しも閉ざされていない。なるほど覚醒時と同じ明確さはもはやないが、しかしその代わりに、万人に共通する外の世界で活動していたときには気づかれないうまでであった多くの「主観的な」印象が取り戻される。睡眠中は、わたしたちはもはや自分のためにしか生きていないので、そのような印象は睡眠中に再び現れる。眠っているときにはわたしたちの知覚が狭まるとも言えない。むしろ、少なくとも或るいくつかの方向において、知覚の働く領域は拡大される。知覚が緊張(tension)において失うものを、拡張(extension)において獲得するのは確かなことである。知覚はほとんど散漫で漠然としたものしかもたらさないが、それでもなお現実の感覚でもってわたしたちは夢を作り出すのである[ES92]。

夢を見るということは、現実にはなにも存在しないものごとの体験ではない。睡眠中においてもわたしたちの身体は感覚し、それによって与えられたものが、曖昧ながらもひとまずその夢の素材として認められるのである。この感覚と身体という次元において生じているということに、ここでは留意しておきたい<sup>8</sup>。

## 2. 目覚めているときの知覚と記憶

食材がそろってもそのままでは料理ができたとは言えないように、なんであれ、材料が揃ってもそのままでは何かができあがったことにはならない。ベルクソンによれば、夢もまた同様に考えてよいようだ。感覚によって与えられた刺激が夢の材料としてあるとしても、それらをひとつの夢として成立させるには、仕立て上げる力がある。ベルクソンはそれを記憶(souvenir)[ES94]と考える。

しかしまず、目覚めているときのことを考えてみよう。わたしたちが或るなん

<sup>8</sup> もっとも、夢には諸感覚による刺激の反映が素材として関わっているという指摘は、心理学においてこの当時すでになされていた。本稿でも後の方で触れるように、それら諸学説の分析と整理を行ったあとでその先に心的要因を、それもとりのけ無意識と前意識との関わりにおいて提示したのがフロイトである。なお、フロイトが『夢判断』で整理して示した「夢の源泉」は以下の四つである。すなわち、①外的(客観的)感覚興奮、②内的(主観的)感覚興奮、③内的(器質的)身体刺激、④純粹に心的な刺激源である。このうち①から③をベルクソンの分類に照らしてみれば、①は外部原因による感覚、②は内部原因による感覚、③は触覚の内部感覚が相当するだろう[フロイト『夢判断(上)』高橋義孝訳、新潮文庫、1969/1998、35-58ページ]。

らかの対象物を認識しようとする場合、その認識は一般的には知覚によって成し遂げられるものと考えられる。対象物を「見ること」により、その何であるかを認識し、あるいはそこに書かれている文字の意味を認識することができるのだ、というようにである。

しかしベルクソンは、認識をそのように単純な事態とはみなさない。知覚によってのみわたしたちが得たと思い込んでいるその認識の多くは、実は記憶に浸されている。むしろベルクソンに倣って考えるならば、現実的には記憶の参入していない知覚などほとんどありえないことになる。生活をするうえで、意識はわたしたちの関心が及ぶところに集中するが、そこには常に記憶が方向づけられ、あるいは差し込まれている。何かを知覚してその何であるかの認識を得ようとするとき——それはほとんど瞬間的なことではあるが——、わたしたちが差し向けて成立させるその知覚には、わたしたちの記憶との連続的で活発な照合作業という、おびただしい反復が含まれているということだ。いや、含まれるどころか、記憶による認識の照合作業こそ本来の知覚というべきだろう。ここには精神の力動的な運動がある。その運動をベルクソンは記憶力（mémoire）と呼ぶ<sup>9</sup>。

わたしたちは、未来を捉えるためには、必ずこれに相当し対応する過去についてのパースペクティヴをもっていなければならない、わたしたちの活動が前へと突き進むそのうしろに空所ができ、そこへ記憶がなだれ込む（se précipiter）のであり、記憶力（mémoire）とは、それゆえ認識の分野におけるわたしたちの意志の不確定性の反響（répercussion）なのである [MM67]。

仮に記憶の参与しないような知覚があるとしても——それをベルクソンは『物質と記憶』で「純粹知覚」（perception pure）と呼ぶが——、それはあくまで権利上のものであり、事実上はありえない [MM31]。

しかしまた、知覚にのみ一方的に記憶が入り込むかという、そういうわけでもない。知覚と記憶の関係は、相互浸透的なものであり、その実質を相互に交換

<sup>9</sup> souvenir と mémoire については、前者を記憶内容という意味でただ「記憶」とし、後者はその力動的な作用面を強調して「記憶力」とした。前者と後者は必ずしも分離独立したものではないが、ベルクソンが精神としての力を認めるのは記憶力であろう。あるいは記憶自体のもつ力を記憶力と解することもできるだろう。



し合っている [MM69]。

ベルクソンは知覚と記憶の連関をひとつの複層的な回路で示している。この回路は、ゴルトシャイダーとミュラーの実験にヒントを得て、注意的な、すなわち反省的な知覚を描いた図式であるが、この実験についてベルクソンは『物質と記憶』でも講演「夢」でも取り上げている [MM113] [ES98]。

その実験は、「入場を固く禁ず」などのしばしば用いられる文言のどこかをわざと間違えて書いたり省いたりしておいて、被験者に短時間で読み取らせるというものである。そして、被験者は全文をじっくり読む時間がないにもかかわらず、そこに本来正しく書かれていたはずの文言を正確に読みあげることができたという実験である。

それは、例えば文字の省かれた文言を見せられた被験者は、文字が存在しないにもかかわらず、省かれていない残りの文字から記憶を呼び覚まし、存在しないはずの文字を見出したと解釈できる。従ってこの被験者は、文字以上に記憶を見たのであると、ベルクソン述べている [ES98]。

こうした事例をもとに、ベルクソンは『物質と記憶』のなかで、知覚と記憶の複層的な回路を円環状の図として示している [MM114-115]。図1 [MM115] の線分Oは知覚の対象そのものである。対象Oの上方に描かれた円環Aは、より対象に密着した直接的な知覚だが、対象についての情報を増大させる知的な努力に応じて、円環はB, C, Dとさらに拡大されていく。このそれぞれの円環には記憶力の全体が入り込んでいるため、対象Oについての知覚の増大は、記憶力とともに対象Oの細部やそれに随伴する事柄をより詳細に示していく。そしてその対象Oをひとつの独立した全体として再構成し、さらにはそれを成立させるシステムの諸条件を再構成していく。下方の円環B', C', D'は、「対象の背後に位置づけられ、対象自体とともに潜在的に与えられている諸原因」[MM115]である。記憶力の浸透した知覚の回路がより高度に拡張するにつれて(B, C, D)、その反射として実在のさらに深い層に到

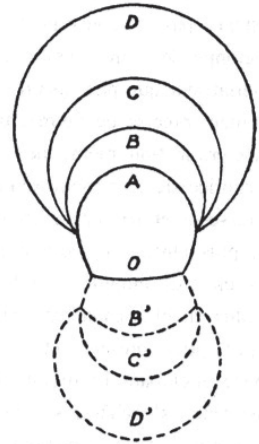


図 1



達するというわけである (B', C', D')。

換言すれば、知覚されることで同時に記憶との照合にかけられた対象についてのその知覚の回路は、そのまま記憶にさらなる情報をもたらすがゆえに記憶自体を豊かに発展させていく (回路 B, C, D)。そしてますます蓄積され豊富になった記憶のさらなる参入により、対象についての今度の知覚はいっそう深く知ることができるようになる (反射の回路 B', C', D') ということだ。

したがって、目覚めているとき、わたしたちの記憶は、常に現在の関心と結びつき、身体の知覚をなす最先端の現在時に刻々と差し向けられている。そのことを示した『物質と記憶』の有名な倒立した円錐 (cône) の図を見てみよう [MM169/181]。

図2 [MM181] の平面 P は、わたしの知覚が成立する運動面であり、行動の平面と呼ばれる。この平面 P には、わたしの現在を表す頂点 S が途切れることなく接触し続けている。それゆえ、わたしの現在の知覚は常に頂点 S において成立していると考えてよい。現在である S を頂点にした円錐 SAB の全体は、蓄積された記憶の全体であり、底面 AB は過去に相当する。

わたしたちの精神は、この円錐の頂点 S から底面 AB の間を、例えば A''B''、あるいは A'B' という具合に、さまざまな中間の断面に位置しながら、数限りなく反復している。ベルクソンはこの円錐の両極に、極端な性格を見分けている。すなわち、頂点 S には衝動的に生きる人 (un impulsif) を、底面 AB には夢想到に生きる人 (un rêveur) をである [MM170]。

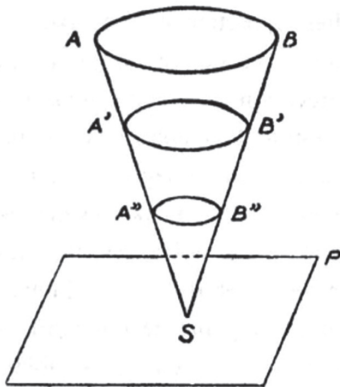


図 2

前者は行動の平面に張りついて———ということは頂点 S と平面 P との接点である純粋な現在に身を置いて———、知覚された刺激に直接反応するばかりである。ここには図1の B, C, D を経めぐるような精神生活の余地はほとんどない。下等動物がその典型としてあげられるが、人間であれば環境に対して瞬時に反作用するような状態であり、状況に対して専ら有用性のみを求めるような態勢とな

る。これに対し、後者は底面 AB という過去に身を置き、現状に対して適切に行動することはなく、無用な夢想の世界に生きる状態である。自動機械のように反応が習慣化された前者は、状況に対していつも類似を見出そうとするが、生活への有用性を重視しない後者は、状況における個別的なものを捉えようとし、差異を見出そうとする [MM172-173]。

ここで、両極の何であるかよりもさらに重要なのは、行動の平面 P に接して絶えず運動する現在の頂点 S には、底面 AB という膨大な記憶のすべてが過去として控え続けているということである。両者は深く関わり合うとしても、二元論的關係を維持し合う。そして一方の過去の記憶全体が、記憶力の集中と拡散によってさまざまな水準の中間断面に位置しながら、他方の現在の知覚へと数限りない連携を成しているという事態が、目覚めているときのわたしたちの精神生活ということになる。

『物質と記憶』のこのような記憶と知覚の關係は、講演「夢」にも引き継がれる。では次に、講演「夢」におけるベルクソンの考察を追ってみよう。

### 3. 倒立していない角錐のイメージとしての知覚と記憶

ベルクソンは講演「夢」においても口頭でわたしたちの生における記憶の構造を説いている。ただし、そこで提示されるのは円錐ではなく、角錐 (pyramide) であり、しかも『物質と記憶』とは上下の向きが逆になる。それに行動の平面も加えて図示すれば、図3のようになるだろう。円錐が角錐になることにおそらく大きな意味はない。事実、下の引用にもあるように、ベルクソンは『物質と記憶』においても円錐と同様に角錐も持ち出していた。しかし、円錐であれ角錐であれ、その上下の向きが逆になったことには多少とも意味があるように思われる。

そもそも『物質と記憶』の円錐 (図2) は、まさしく倒立さ

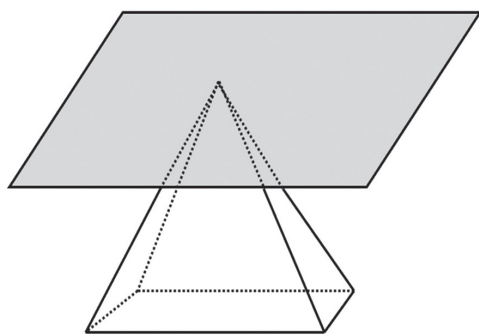


図3

せることで、ベルクソンが考える精神と身体を具体的に説明することに成功していると思われる。頂点が下にあるということは、その頂点でもって記憶の全体を支えるということになるからである。図2においては便宜的に底面 AB を示してそこに記憶の極限が過去として位置づけられてはいるが、厳密に言えば、記憶の脳内局在説をとらないベルクソンにおいて、記憶は底面 AB に縁取られて局在するわけではなく、それこそそうした輪郭と次元を無限に超出して存在する。そのような際限なき記憶にそれでもひとつの決まりをつけるのがわたしたちの身体であった。この他ならぬ身体によってこそ、記憶はバランスを保ちうるのである。水面に漂って浮遊する水草の不安定な葉を、水面下の地中でしっかりと支えている根のように、縮約と拡散という無限の振幅を繰り返す無数の記憶を支えているのは、行動の平面にその先端を差し込んで現在という厚みに凝縮される、最下部に位置した倒立円錐の頂点なのである。ベルクソンは次のように述べている。

わたしたちの身体は、一方ではそれが受け入れる諸々の感覚と、他方ではそれが遂行しうる諸々の運動とを併せもって、まさにわたしたちの精神を固定するもの、精神に重し (lest)<sup>10</sup> と平衡 (équilibre) を与えるものである。精神の活動は、蓄積された記憶の総体を限りなく超え出るものであり、記憶の総体自体もまた、現在の感覚と運動を限りなく超え出ている。しかしこれらの感覚と運動が、生活への注意ともいべきものを条件づけているのであり、だからこそ、精神の通常の働きにおいては、ちょうど頂点を下にして逆さまに立つ角錐 (pyramide) のように、すべてがそれらの結びつき (cohésion) にかかっているのである [MM193]。

目覚めていて生活するときのわたしたちの感覚と運動は、そこに役に立つ記憶をその総体から差し向けつつ、行動の平面上に文字通り下向きに落着し、前進する。そのイメージが倒立というわけであった。

しかし講演「夢」では、角錐 (図3) は倒立しない。講演「夢」でベルクソンは、目覚めているときの無数の記憶の総体は、『物質と記憶』のときとは逆に、上

<sup>10</sup> lest とは海事用語でいう「バラスト」のこと。すなわち、船を安定させるために船底に積む水や砂などの「底荷」を意味する。

ではなく「下に」(en bas)、あるいは「下方に」(au-dessous) であると述べている [ES95]。そしてそこからわたしたちが眠っているときの状態へ考察をすすめ、次のように記憶について言い表している。

わたしが現在の状況や差し迫った行動に興味を失い、すべての記憶の働きを一点に集中することに無関心になるという事態を想像してみよう。換言すれば、私が眠りこむと想像してみよう。いままで動きのなかった記憶は、障害物が取り除かれ、自分たちを意識の地下室 (sous-sol de la conscience) に閉じ込めていた揚げ蓋 (trappe) が取り去られたのを感じて動き出す [ES95] (傍点の強調は筆者)。

比喩表現とはいえ、ここにはまず、記憶が下方の暗い深みに蓄積されている様子が見てとれる。『物質と記憶』の倒立した円錐 (図2) の底面 AB は、図中ではひとつの極限として描かれているが、事態としては底面をも超出し、はるか高みに至るまであらゆる記憶の総体が積み重なって存在している。それに比して、講演「夢」での角錐 (図3) では、その底面は文字どおり下方に位置する底の面であり、それがあたかも地下室への出入り口をふさぐ揚げ蓋であるかのごとく、記憶が階下に押し込まれているイメージが描写される。

『物質と記憶』と講演「夢」における上下の向きの違いには、次の二つの点でその理由を指摘できるように思われる。ひとつはフロイトの影響、そしてもうひとつは、本講第一節でも示した夢の素材としての感覚的刺激との関係である。そこでまず前者について、上の引用の続きを見てみよう。

(揚げ蓋が取られたあとの地下室の) 記憶は、起き上がって騒ぎ出し、無意識の夜の闇のなかで巨大な死の舞踏を踊り出す。そしてみんな一緒になって開きかけたドアへと殺到する。みんながそこを出たがるのだ。しかし、数が多すぎてできないのである [ES96] (括弧内の補足は筆者)。

ここに書かれた無意識は、フロイトの無意識と同じものとは言えないが、そもそも「地下室への閉じ込め」に「抑圧」のイメージを、「起き上がって騒ぎ出す」

ところに「リビドー」的なものを、さらには「開きかけたドアへの殺到」とその制限に「前意識」による「検閲」に似た何かを見てとることはできるだろう。事実、ベルクソン自身、講演「夢」にてフロイトの名を挙げ、さらにその注でフロイト学派の抑圧について言及している〔ES107〕。この当時、フロイトの精神分析自体はまだ発展途上のものであったが、夢に関するフロイトの著作（『夢判断』1900年）はベルクソンが講演を行った時点ですでに刊行されていたとベルクソン自身のちに注記している。フロイトが無意識を中心とする心的装置の全貌を明らかにしたのは1917年刊行の『精神分析学入門』とみることもできるが、『夢判断』においても、例えばその第七章などで、無意識や前意識の理論が詳細に提示されている。さらに、講演「夢」が収録される『精神のエネルギー』の刊行は、フロイトの『精神分析学入門』の二年後、すなわち1919年であったことを考えても、両者の間に影響関係はなかったとは言えないだろう。例えばフロイトは『夢判断』のなかで抑圧について次のように言っている。

われわれが精神神経症学において使用している抑圧理論の主張するところはこうである、「こういう抑圧された願望は現になお存在しつづけるが、しかし同時に、そういう願望の上に覆いかぶさっている抑圧もまた現に存在する」かかる衝動を「下へ向かって抑えつける」という言葉は事態を正確に表現している<sup>11</sup>（傍点の強調は筆者）。

あるいは、フロイトが提示する、巨大で中味の豊富な「夢思想」（潜在内容 / Traumgedanken）と簡略で貧弱な「夢内容」（顕在内容 / Trauminhalt）との間の大がかりな「圧縮」の作業<sup>12</sup>であるとか、抑圧の説明としての夢の「第二次加工」における「心的検問所」<sup>13</sup>等々、それがあくまで外面的な言葉の上での類似であったとしても、夢見をめぐるベルクソンとフロイトの見解には少なからず共通する認識があると指摘することができるだろう。

<sup>11</sup> フロイト、前掲書、302 ページ。

<sup>12</sup> フロイト、同書、357-363 ページ。

<sup>13</sup> フロイト『夢判断（下）』高橋義孝訳、新潮文庫、1969/1996、233 ページ。

角錐を倒立させずに用いた理由のもうひとつは、ベルクソンの知覚－記憶理論のなかで夢見の現象を考えたときの感覚の問題が起因していると思われる。夢には、下方の底面から呼び起こされた無数の記憶が、すべてではなく、限定されて採用されるが、何が選ばれるか、その決め手になるのはあの内部原因や外部原因の諸感覚だとベルクソンは言っている [ES96]。

しかし、その構造は単純ではない。すでに見たように、わたしたちは目覚めていようといまいと、図2の頂点Sにおいて行動の平面と接触し続けている。覚醒時のいわゆる白昼夢とよばれる状態でさえ、頂点Sは行動の平面から離れない。そこはわたしたちの現在時であり、ただそれに対して精神がどの断面に位置しようとするか（A”B” か、A'B' か・・・）に応じて、衝動の人にも夢想の人にもなり得たのである。いま、わたしが眠りに落ちたとき、頂点Sによる平面との接続は維持しながら、わたしの精神はかぎりなく底面に落ち着こうとするはずである。この場合、頂点Sのわたしの「現在」は、しかしそれに対するわたしの注意や関心が消えることで、身体として「現在」にありながらも、わたしの精神は「現在」から乖離し、あるいは過去へと遊離することになる。人は確かに、眠りに落ちると同時に「時」そのものを忘れるものである。車の運転中に睡魔に襲われ、居眠りをして事故につながる例があるが、「まさにいま運転中である」という、極めて多大な注意を要する「現在」からも、睡魔はわたしたちをいとも簡単に引き剥がしてしまう<sup>14</sup>。

しかし、そのような状態でも、私たちは頂点Sにおいて、ある意味では常に「現在」でもある。それは、わたし以外のだれかが、眠っているわたしを一瞥すればわかる事実でもあろう。わたしはただ眠りに落ちた身体として、あるいはベルクソンの言え、他者の知覚におけるひとつの「イメージ」として、その他者

<sup>14</sup> W.C. デメントは、1988年1月14日午前5時30分にペンシルヴェニアで起きた、列車の乗務員の居眠りによる正面衝突事故をとりあげ、睡眠への欲求が私たちの生命に対しておそるべき力をもっていること、睡眠不足による睡眠への衝動は急速に生命そのものよりも重要となり、死を回避するためにすら目覚めていることができなくなることを指摘した上で、次のように言っている。「二日か三日以上覚醒を続けることは言いようもないほど難しいこと、ほんのわずかの睡眠を手に入れるためには喜んで自分の生命を（運転中でも）危険に曝すといった事実は、睡眠が生物の健康と生存にとって非常に重要であることを強く示唆している」[W.C. デメント, 前掲書, 60 ページ] (括弧内の挿入は筆者)。



の「現在」なのである。

眠っていても、わたしたちの感覚が眠らずにいることは、第一節で見たとおりである。感覚は、外界の印象に対して閉ざされていない。頂点Sを通じて、と書くことに多少違和感もあるが、しかし行動へと意欲することなしに<sup>15</sup>、あの眠っている間にもつ種々の感覚が、あたかも平面上から円錐ないし角錐の頂点を通して底面へと降り注ぐかのようにして記憶の深みに達するとき、夢が誕生するのである。この、あたかも重力にまかせるような諸感覚の刺激の落下と、それを下で待ち受ける記憶の横溢の構図は、ほかでもなく図3のような底面を下にもつ倒立せざる角錐がふさわしいに違いない。

なお、ベルクソンは、感覚が記憶と結合して夢が発生する様子を、プロティノスの『エネアデス』を引いて説明している。魂と肉体の合一は、自然による下書きという用意があるからこそ成立するという点に、記憶と感覚の結びつきを重ね、さらにそれらの関係を、形相と質料の関係として捉えている<sup>16</sup>。

#### 4. 覚醒と睡眠の違いと夢の特徴

夢が出来るメカニズムは、わたしたちが目覚めているときに視覚像がつくられるメカニズムとほとんど変わらないとベルクソンは言う [ES97]。図1に見たように、覚醒時の記憶は、ある対象の知覚に際し、幾重にも回路を往還しながら、そこに俊敏かつ十全に適用すべく待ち構えている。一方には、感官に与えられた印象や刺激があり（頂点S）、他方には、そこに参与すべく待機中の記憶がある。

<sup>15</sup> ベルクソンは「目覚めることと意欲すること (vouloir) は同じひとつのこと」とも言っている [ES104]

<sup>16</sup> PUF Quadrige の増補校訂版における Guillaume Sibertin-Blanc の note によれば、ベルクソンによるプロティノスの参照箇所は『エネアデス』VI, 7, §5-7 とされている。『エネアデス』VI, 7 は「いかにしてアイデアの群が成立したか。および善者について」という表題をもち、人間が作られるとき、なぜ人間に感覚が必要であることがわかったか、という問いのもと、感覚界の成立の原因や直知界の構造等が展開される。その第7章には「下書き」についての言及があり、個別的な魂が世界の素材へやってくる前に素材には下書きが、「いわば前触লের照明」として施され、その痕跡を辿りながら魂たちは仕上げ——近づいたところのものになること——を行うと記されている [プロティノス全集 第四巻 田中美知太郎、水地宗明、田之頭安彦訳、中央公論社、1987年、413-414 ページ]。ベルクソンはこの箇所、体も魂の方に向けて立ち上がり、魂は魂で自分に合う体に目をとめ、心奪われて落下することにより生命が始まると述べているが、少なくともそうした記載は Guillaume Sibertin-Blanc の指示した箇所には見当たらない。



この構図が通常のメカニズムだが、夢のメカニズムも同様であったのだ。

講演「夢」の後半は、知覚と夢の違いを取り上げている。ベルクソンはまず、睡眠中だからといって、論理的な思考ができなくなるわけではないことに言及する [ES100-101]。夢の中でも推論は成立するものとして、論理に無関心になることはあっても不可能になることはないのである。さらに、睡眠中に感覚が閉ざされることがないことを踏まえた上で、目覚めているときと眠って夢を見ているときの本質的な違いを明らかにしようとする。

ベルクソンによれば、目覚めている人と夢を見ている人の違いは、適合の正確さを求める精神の積極的な努力の有無だけである [ES104]。

目覚めていようと、夢を見ていようと、いずれにおいても同じ機能が働いているのだが、それらの機能はしかし、一方においては緊張し (*tendu*)、他方においては弛緩している (*relâché*)。夢は心的生活の全体から集中の努力を引いたものなのである [ES104]。

ベルクソンは自身の夢を描写して、具体的に説明している。それは、ベルクソン自身が講演しているときに聴衆の不平不満の声を聞き、やがて「追い出せ、追い出せ」と叫び出すのを聞く夢である。そして目が覚めると、隣の家がワンワンと吠えていたという。ここでベルクソンは、ワンワンという犬の鳴き声が、まさしく犬の鳴き声であるとかかるということは、一見なんでもないように見えるが、しかしほんとうはたいへんな努力をしているという点を強調する。すなわち、ひとがこれまでに蓄えた経験すべて、要するに記憶の全体を、一挙に収縮させ、ある一点（この場合、ワンワンという吠え声）に適合させて、その何であるかがわかるように努力しているということである [ES102]。しかし、夢のなかではそれがない。夢のなかでは記憶は弛緩したままで、犬の吠え声と聴衆の声は区別がつかないのである。

ベルクソンに倣って筆者自身が記録した夢に、以下のようなものがある。その夢は、筆者が大学で講義を始めようとしているところから始まる。授業の開始時間となり、PCで作成したスライドを、大教室のスクリーンにプロジェクターで投影しようとするのだが、なぜかうまくいかない。ざわつく教室を横目に悪戦苦闘

し、ついに接続ケーブルか電源ケーブルか何か、このあたり正確には思い出せないが、とにかく問題の箇所を発見する。そしておそらくは代替のケーブルか何かを研究室か講師室に取りに行ったのであろう、筆者は教室をあとにする。だが次に、筆者はなぜか、自宅のある団地へとつづく遊歩道にいた。それも、近所の小学校からその道を通して筆者は自宅へと急いでいる。そして団地が見えたあたりで目を覚ました。

夢に登場したそれぞれの場面や場所や事物や事柄と現在の筆者との関わりに思うところが多々あって、筆者にはそれなりに感慨深い夢であったため、目覚めたあともその内容を鮮明に覚えていて、ノートに書き付けることができた。小学校内に併設された学童ルームに預けた子どもを19時までに迎え行き、夕刻の薄暗がりの中、子どもと手をつなぎながら自宅へ向かって幾度となく歩いた緑の小径がその遊歩道であった。その道のなんであるかが分かるには、目覚めて知覚し、そこに正確に適合させる精神の集中の努力がいる。が、夢のなかの筆者は、代替の接続ケーブルを探しに教室を出て、何も疑わずにその小径を自宅へと急いでいた。大学と自宅は、実際には車で一時間以上も離れたところにあるにもかかわらず、である。ベルクソンがいわんとする夢見における精神の弛緩がここに見て取れるだろう。夢のなかでベルクソンが犬の吠え声と聴衆の声とを照合することがなかったように、そして目覚めるまで区別がつかなかったように、筆者も大学構内の通路と自宅付近の遊歩道を夢のなかでは照合させることも区別することもなかったのである。

講演「夢」は、夢の特徴として、「移り気であること」(instabilité)、「展開が速いこと」、「無意味な記憶を選ぶこと」などを挙げて終わる [ES105-108]。それらを上の筆者の夢の例に当てはめてみよう。筆者は、「急がなければならない」という思いがあれこれと形を変えて夢に現れたと考えている。講義の開始、代替ケーブルの入手、子どもの迎え、帰宅後の家事、これらすべて、急いでやらなければならないことが、移り気に登場したように思われる。さらに、大学の教室を出た筆者がたちどころに遠く離れた自宅付近にいるという、まるでキートンのコメディ映画のような展開の速さも認められた。では、最後の点はどうか。夢はどちらかというと稲妻のように過ぎ去った思いや、注意せずに知覚した対象を呼び戻すとベルクソンは言っている [ES107]。筆者の現実の生活に生じた変化に照らしてみ

るならば、この夢に生じた出来事は、ベルクソンの指摘に合致するところもあるように思われた。

いずれにしても、このように夢をもたらず眠りとは、そもそもいったい何であろうか。本稿第一章でも触れたように、眠るということは必ずしも活動の休止を意味しない。しかしそれでもわたしたちは「おやすみなさい」と言い合うように、眠ることを「休むこと」と同一視している。たしかに、睡眠をとるということは、休息し、休眠し、覚醒時の心身の諸活動を中断することのようにも思われる。

例えば、「見る」ということは、視覚的な信号が網膜で受容され、視床および視覚皮質に伝達処理されることであると分かっている。しかし、睡眠中に仮にまぶたをテープで留めて開いたままにしたとしても、その睡眠中の被験者は意識的に何かを見るということはなく、ただ眠ったままである。そこにいわゆる「見る」は成立しない<sup>17</sup>。しかしこの事態だけを見れば、睡眠はやはり「活動の停止」と捉えることもできる。

ベルクソンは、講演「夢」でとりあげた眠りが、いわゆる「浅い眠り」であって、「深い眠り」についてはまた別であろうと述べている [ES108]。今日、レム睡眠とノンレム睡眠と呼ばれるものの区別かと思われる。

レム睡眠とノンレム睡眠の区別について、生理学的な観点から概括的に言えば、前者には眼球の急速回転運動がある一方、身体運動は強く抑制され、わずかに筋痙攣が生じるのみであるが、後者のノンレム睡眠時には眼球運動も筋痙攣も生じない。また脳波を比べると、前者のレム睡眠中には覚醒時と変わらない活発な活動が見られるが、後者では周波数のゆっくりした脳波が示され、それは徐波睡眠とも呼ばれている<sup>18</sup>。

ただし、例えば生理学者のデメントは、レム睡眠とノンレム睡眠の区別はそれぞれの定義がまさにそうであるように、「睡眠の随伴現象に関して述べられ」たものでしかなく、「大部分は実に表面的なもの」だと指摘している<sup>19</sup>。彼はまた、個々の神経細胞の発火率など、「より知的に洗練された随伴現象で定義」を試みた場合には、ノンレム睡眠中に、脳内の神経細胞の発火率が覚醒時と比べると減少する

<sup>17</sup> W.C. デメント, 前掲書, 63 ページ。

<sup>18</sup> W.C. デメント, 同書, 64-65 ページ。および、北浜邦夫『脳と睡眠』(朝倉書店, 2009 年)を参照。

<sup>19</sup> W.C. デメント, 同書, 65 ページ。

ことは認めても、脳の多くの領域では発火率はまったく変わらず、「いくつかの重要な領域ではかえって神経細胞活動は活発」であるとして、「脳の活動が止まった」とは到底考えられないと述べている<sup>20</sup>。

デメントは、発火率や代謝の減少が「何も活動していないこと」を意味するのではないとして、例えば次のような例を挙げている。市街地を空から俯瞰して見たとき、その街が活動的に見えるのは交通量の多い朝晩のラッシュアワーであろう。朝方のラッシュアワーが終わると交通量が減り、空から見れば街全体が休息状態に入ったかに見えるかもしれない。が、事実はそうではない。オフィスや学校の建物内部では、朝よりも活発な活動が行われている。ただしそれは空からは見えない。同様のことが脳にも言える。デメントは、細胞の「間」に起こるものが何もなくても、細胞の「内部」では活発に何かが起こっているかも知れないと述べている<sup>21</sup>。

眠りは今日、それが浅いものであれ深いものであれ、生理学的に見てもその状態は必ずしも「活動の停止」とは言えないのである。またここでは、一見なにも存在しないかに見えるところに活動的なものの「潜在」を見ようとするこの生理学者のまなざしが、ベルクソン哲学のそれと重なることも指摘しておきたい。

生における諸活動は眠りにおいても中断されず、目覚めているときとほぼ同様に続いている。いまやわたしたちは、次のように言えるだろう。覚醒と睡眠には本性上の差異はない。差異があるとすれば、程度の差であって、それをわたしたちは、ベルクソンとともに、精神のとりうる時間的な位相の差異と認めることができるだろう。

## おわりに

デメントによれば、フランスの睡眠学を牽引した大脳生理学者のミッシェル・ジュヴェは、次のような興味深い仮説を立てたという。ジュヴェは、自らに生じた五千個の夢を分析し、その結果、自宅から遠く離れた所や外国を旅行した際にはなぜか自分の家の夢を見ていることが少なからずあることを見出した。そこから彼は、夢の根源的な機能のひとつは、原始人たちに自分の洞穴に戻る道をみつ

<sup>20</sup> W.C. デメント, 同書, 65 ページ。

<sup>21</sup> W.C. デメント, 同書, 66 ページ。

けられるようにすること、あるいは、夢で自宅を思い出させることで安全に帰宅する動機を与えることではないか、と考えたのである<sup>22</sup>。この仮説は、単に身の上の安全上の問題にとどまらないように思われる。この仮説はわたしたちに、わたしたちの生にとって過去があること、すなわち、記憶があることの意味と、そこに身を置き直してみることの意義を考える大きなヒントを与えてくれるように思われる。

わたしたちはベルクソンの論稿を通して、夢見の現象におけるわたしたちの眠りが、目覚めているときと何ら変わらないことを確認した。眠っていても、感覚は開かれたまま、休まない。ただひとつ異なるのは、頂点Sへと正確さを求めて差し向けられる、注意という精神の努力の有無である。しかし、そこには精神の努力の有無があるだけで、精神自体が休んでいるわけではない。弛緩は、休息のイメージがあっても、休息と同義ではない。むしろ弛緩により記憶は自由に解放され、その意味において精神の力はかたときも休むことがないように見える<sup>23</sup>。

眠りにおいて休んでいるものは何か、という問いに対し、いまやわたしたちは次のように答えることができるだろう。それは「現在時に立つことを休んでいる」と。眠りとは、そしてその夢見とは、知覚感覚としての現在から——つまり物質へと化しつつある最先端の頂点Sから——意識の極大へと下降していくこと、謎めいた無数の過去を秘蔵するピラミッド（角錐）の深部へ、すなわち過去そのものへ、すなわち純粋な記憶の彼方へと降りていく活動である。現在時に身を置くことを休むとき、わたしたちは過去に触れて記憶の自由と活発に生きている。それは、わたしたちの人生の三分の一もの時間を費やした、わたしたちが「生きていくため」の積極的かつ逆説的な活動の一形態なのである。

<sup>22</sup> W.C. デメント, 同書, 174 ページ。

<sup>23</sup> 講演「夢」を収録した書物のタイトルが『精神のエネルギー』であることに、ベルクソンの意図が読み取れるだろう。なお、日本において『精神のエネルギー』は、おそらくまず1932年に小林太市郎により『精神力』という邦題で翻訳書が刊行されている（初めは第一書房から。1946年には同訳者による同邦題で全国書房から。『精神のエネルギー』という邦題は、1965年に白水社からベルグソン全集が刊行された際、渡辺秀が用いた）。ただし講演「夢」は、『精神のエネルギー』（『精神力』）刊行以前に単体で邦訳出版されている。1925年に篠崎初太郎が異端社から「夢の研究」として、1936年には広瀬哲士が東京堂から「夢と哲学」として、1956年には竹内芳郎が河出書房から「夢について」としてである。